コ(秋山菜津子)だ。彼女はサチコの中学時代の担任教師で、極度の機械フェチ。そんな“機械つながり”から、ケイコはミチオと結ばれ、「私、あんたのマシーンになる」とミチオとの絶対的な服従関係を自ら宣言する。

こうしてエキセントリックな人間愛憎劇と、ねじ曲がった家族の物語が、人間の本質をえぐるかのように破滅的な結末へと加速していく……。

舞台『マシーン日記』の内容を文字化すると、このようにダークで、グロテスクな非日常の世界を描いた舞台だと、おそらく誰しもが想像してしまうだろう。実際台本には、過激なバイオレンスや直接的なセックス・シーンがこれでもかというほど繰り返し書かれている。しかしこの舞台では、恐怖や不気味さが頂点に達すると、それが裏返って笑いに転ずる瞬間も多々存在しており、それらの毒気と笑いこそが、まさしく“松尾作品”の真骨頂。そしてそのシナリオを斬新な切り口で、ダンス的ポップな表現で演出したのが大根氏であり、そこに不可欠だったものが、岩寺、江島、岡崎、草刈により生み出された劇伴だったのだ。

「大根さんから最初に言われたのは、他の演劇は参考にしない方がいい、ということ。それは『バクマン。』の時も同じで。きっと大根さんは、ありがちな劇伴音楽ではないものを僕らに求めていたんだと思ったんです。それで、舞台の音楽を作るのは初めてでしたけど、他の舞台を参考にはしませんでした」(江島)

「大根さんから唯一言われたのは“工場テクノ”というキーワード。町工場の機械の動きにテクノを重ねた《INDUSTRIAL JP/工場音楽レーベル》という動画があって。それを見せてくださって、『こういう音楽が欲しい。会場をクラブにしたい』ということだけを言われました。だから会場にサブウーファーを入れて重低音を鳴らしたいということも、最初の打ち合わせで大根さんご自身がおっしゃっていたことなんです」(草刈)

「そこでまず、4人で“工場テクノ”をいっぱい作っていって。曲数を増やして、それに対して大根さんから、『この曲をもっとこういう感じで』とリクエストが返ってきたものを、イメージの湧いたメンバーが引き受けて、曲をブラッシュアップしていくという流れでした」(岩寺)

「あと“工場テクノ”ではないバンド・アレンジの曲は、新曲『月の椀』のレコーディングと同時に、スタジオでセッションしながら作っていったりもしていました」(岡崎)

メンバーの話を聞くと、作業は順調に進んでいったようにも思えるが、そこには数々の新たな挑戦があった。まず、大根作品の劇伴制作は二度目とは言え、映画と舞台は似て非なるもの。一番の違いは、映画は時間の流れが確定している映像に対して音楽を付けるのに対し、舞台では役者がライブで行う演技に音楽を当てて い